

JR西日本の新幹線 300キロ体感研修に批判続出！

2018年(平成30年)8月24日(金) 夕刊

毎 日 新 聞

JR西 新幹線 時速300キロ 体感研修

トンネル内 頭上通過

JR西日本が新幹線のトンネル内に、通務業務では線路内に立ち入らない車両検査の社員を座らせ、最高時速300キロを間近で体感させる研修をしていることが、同社や関係者への取材で判明した。同社はボルト締め付けの確認などの重要性を説いてはいるが、労働組合の専門家は効果を疑問視する声がある。

社員「怖かった」

JR西によると、トンネル内には上り下りの線路の間に幅約1.5メートル、高さ約1.5メートルの通路がある。研修は通路に数人がうすくまわり、頭上の間近を通過する新幹線2本の風圧を体感する。2015年に福岡県のとんネル内であった部品落下事故を受けて、車両検査を担う多線合車両所と同広島支所が16年2月に始めた。今年7月末現在、

小倉・博多間と広島・新宮間で行われていた。約190人が体感した。50代のベテラン男性社員によると、研修は300km/h近接体感研修と呼ばれ、怖いと聞いていたのに、実際に乗ると「順番なので」と認められなかった。当日は2班に分かれて順にトンネルに入り、ヘルメットと防護眼鏡を着け、線路内に立ち入らない車両検査の社員を座らせ、最高時速300キロを間近で体感させる研修をしていることが、同社や関係者への取材で判明した。同社はボルト締め付けの確認などの重要性を説いてはいるが、労働組合の専門家は効果を疑問視する声がある。

8月24日の毎日新聞夕刊に「JR西 新幹線 300キロ体感研修」「トンネル内 頭上通過」との見出しの記事が掲載され、翌朝の東京新聞(共同通信配信)、産経新聞にも取り上げられた。また、同日夕方の関西テレビニュースを皮切りに、各局のニュースでも報道された。

新聞報道の中で、甲南大の熊沢誠名誉教授(労使関係論)は「研修は労務管理の良識に反しており、研修の域を超えている。社員に恐怖感や閉塞感を与えるもので、ハラスメントに近く、いまずぐやめるべきだ」と指摘している。

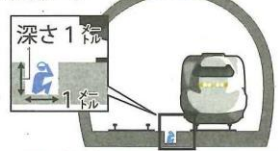
この300キロ体感研修は、2015年8月にトンネル走行中の新幹線で車両カバーが脱落し、乗客が負傷したことを受けて始まったもの。

JR総連加盟のJR西労は、2017年5月に「300km/h 近接体感中止の申し入れ」を行い、再三再四議論し、『中止』を要求したが、JR西日本はいまだに中止していない。

そもそも、この研修のきっかけとなった車両カバーの脱落は、パンタグラフや台車を交換して高速走行試験を実施した車両を、営業運転用に戻す検査でボルトを締め忘れて起こった事故である。事故対策そのものが間違っている。

8月26日、JR総連ホームページ「お問い合わせ」に一般の方からご意見をいただいたので紹介する。

トンネル内での時速300キロ体感研修のイメージ



トンネルを通過する山陽新幹線(広島県江田町)6月17日、本社へから山田尚弘撮影

研修は終了。別の日に研修を受けた同職も「怖いと話していた」という。研修のきっかけとなった事故は、15年8月8日に発生。国の運輸安全委員会の報告書によると、新幹線2両目下部のアルミ合金製の板(幅71センチ、高さ62.5センチ)が落下して側壁

研修方法として問題

中村隆宏 関西大教授(ヒューマンエリート)の話 労務防止の

ため疑似的危険を体感させる安全教育は一般的であるが、トンネル内はリスクがゼロでない。研修方法として問題がある。インパクトがある経験人間は変わるという前提も無いが、そんなに簡単にヒューマンエラーはなくなる。トンネル内で体感すること、検査の重要性を実感することは、ステップが離れすぎていて、間を埋める教育がないと意味がない。

や車体側面に当たり、衝撃で3両目の乗客が負傷した。ボルトの締め付けが不十分だった可能性が高く、検査時を確認不徹底も一因とされた。男性社員は「ボルトが緩かったらどうなるか、トンネル内で速度を体感せずとも理解できる。社員を危険にさらすのは問題だ」と訴え、別の社員も「慣れしめのない研修も、慣れを学んでほしい」という。JR西日本労働組合(JR西労)は昨年5月700人は昨年5月以降、中止を申し入れているが、会社は応じていない。同様の研修はJR東海が15年度まで約5年間、一部社員を対象に実施していた。JR西は、中央通路での待機は、線路内に通常業務で立ち入る機会のある社員は経験している。車両関係の社員にも経験する機会を学ばせ、作業の重要性を学んでほしい」という。安全には十分配慮している」と説明する。

JR総連HP「お問い合わせ」へのご意見

新幹線トンネル内での風圧体感「研修」はヒドイ!と思ひまして、JR西日本会社のHPに意見を申しました。意見は次の通りです。

このようなページを設けておられることに敬意を表します。

報道によりますと、御社は、新幹線のトンネル内において通過列車の間近で猛烈な風圧を体感する研修を受けさせているとのこと。想像を絶するような恐怖を感じ、万一の危険性も大きいであろうことは容易に推察できます。

人間、それほどの体験をしなければ「仕事の重要性を再認識」することができない—と御社役員・幹部は考えておられるのでしょうか。それなら、そのような研修を必要とする役員・幹部の方々がまず体験なさって手本を示すべきでしょう。必要とお考えの方が自らの意思で身をもって体験され、その意義を説明され、本心からの納得が得られるようにすべきです。それで納得が得られないなら、実行すべきではありません。

恐怖体験研修を拒否できない労働者に無理強いすることはハラスメントです。「安全を第一に」と懸命に働いておられる社員のみなさんを精神的・心理的に圧迫し、追い詰める働かせ方が結局は安全を脅かすことにつながることは、御社が引き起こしたアノ大事故で示されているのではないのでしょうか。

鉄道が大好きな者の一人として、恐怖で脅かす「研修」は今すぐに取りやめてくださるよう、心からお願いいたします。